

性同一性、性役割の獲得・形成過程と「おたく」現象 —男性学に向けてのひとつの視座—

田代 順

1. はじめに

本論文を執筆するにあたって、その動機となったものは、宮崎勤事件である。いまだ、記憶に新しいところだが、幼女連続殺人という性倒錯的犯罪と彼の日常生活における「おたく」的生活双方の「異様さ」が当時、かなりのセンセーショナルを巻き起こした。事件そのものの特異性はもとより、筆者が強く感じたのは、①なぜ、「男性」が（「女性」に比べて圧倒的に）このような倒錯的な連続殺人を含めて、「性倒錯」に陥りやすいのか。¹⁾

〈補1—日本に比べて、はるかに凶悪犯罪の多い欧米では、犯人像を特定するための行動科学的方法がFBIなどで用いられている。（例えば、プロファイリングなど）それらによれば、性倒錯が絡んだ犯罪や連続殺人などの凶悪犯罪は、ほぼ100%男性によるものと報告されている。欧米ほどではないにせよ、日本においても、世情を騒がせる凶悪事件はほとんど男性によるものである〉

②現況日本において、「おたく」²⁾といわれる現象はなぜ男性にかたよってあるのか。アニメなど、擬人化されたものには女性マニアも見受けられるが、鉄道マニア（もちろん、これは旅行マニアではなく時刻表への偏愛、電車列車そのものに愛着感じるなどのマニアを指す）モデルガンマニア、ナイフマニア、プラモデルマニアなど（とりわけ人形やぬいぐるみなど擬人化されやすい、生き物のメタファーとしての対象物でなく機械のメタファーとしての対象物）まさしく「モノ」そのものを志向するモノマニアは、

ほとんど圧倒的に男性マニアがしめている。女性の側のプラモデルやナイフへのマニアックな執着はない。その方面のモノマニア雑誌の読者のコーナーを見ても100%が男性である。

〈補2—「おたく」の意味するスペクトルは広範囲にわたる。その人のマニアぶりのみならず、人格的に「変人」「人とうまくやれない人」などのある種のパーソナリティの側面まで含むことがある〉

以上の①②で述べたことの男性への「偏り」が指し示すものは、男性という性がある方向に向けて特徴づけているのではないか、すると、この問いはまた、必然的に男性という「性」は、いかにして成立していくかといことを問うことにもつながってくるであろう。

2. 本論文の基本的視座

これまで、女性学をはじめとして、様々な分野が男女の違いを論じてきた。現況のそれに関わる論文をレビューしても、それこそ大脳生理学から社会学、文化人類学に至るまで百花繚乱の状況である。

本論は、現況の日本における文化的・社会的状況を根底において、筆者の専門である臨床心理学（その中でも、精神分析学）³⁾と社会学の視点から、男女の性同一性、性役割の獲得・形成過程を論ずる。その後、性同一性、性役割の形成と発達過程が、「おたく」という現象といかに関連してあるかを検討考察する。同時に「おたく」を論述することを含めて、男性のセクシュアリティの問題を論ずる。

〈補3—性同一性、性役割；性同一性に関して

は、3つのカテゴリーがある。①生物学的性器によって区分されたもの②社会や文化が要請してくる「男らしさ」「女らしさ」によって区分されたもの③性の活動（端的に性交）に結びついて行く、性の嗜好（異性愛・同性愛など）によって区分されたもの。ただしこの3つは相互に結びつきながら性に関わる基本的認識を個人に形成している。性役割は、上記②の概念とほぼ同様で、性別によって社会・文化・集団から期待される役割が違うことを指す)

3. 精神分析学の視点からの関係形成と性同一性、性役割の獲得を巡って

さて、この章では、性同一性、性役割が獲得され形成されて行く基盤となる関係の問題を検討考察する。自分の性同一性、性役割の獲得・形成が他者との関係においてどのように規定されていくのかを、「他者との関係」に関して緻密な理論体系を持っている精神分析学の視点から、以下論じていく。

精神分析学、特にラカンや岸田らの理論によれば、自分とは「他者」の事であるという。つまり、自分という存在を認識していくためには、たえず他者の存在を前提にすることである。

生まれたばかりの赤児には自他の区別はほとんどなく、あたかも全宇宙と融合している状況であるという。つまり、自分と自分を取り巻く世界、それに引き続く他者はほとんど存在していない。そのような状況から世界や他者を認識するためには、その世界や他者からの生理的・心理的な「齟齬」や「欲求不満」を必要とする。どういうことか。たとえば、自分の体温とまったく同様な温度の風呂に入浴した場合、自分の皮膚と風呂の境界の判別は困難になる。これと同様に我々が、自他の区別をし得るのは、自分の欲求などを即座に満足させられたときではなく、欲求の挫折や齟齬によって初めて、自他の

区別を認識するのである。もし、赤子の生理的・心理的欲求を即座に読みとると同時に満足させる育児ロボットができれば、その赤子は永遠に自他の区別ができないであろう。おなかの中の羊水に浸っている状況がそのまま続行するわけである。また、すでに言葉を持っているわれわれが思考する際のことを考えてみる。思考する行為を折出している自分の中に、言葉を通して「他者」を生み出し、その「他者」と会話しつつ思考しているのである。

このように自分を自分たらしめる出発点にあるのは、自分自身でなく、まぎれもなく他者である。つまり、他者の存在を認知することを通して、「自分」というものを折出させているのである。そして、ほとんどの人間にとって最初の極めて重要な他者となるのは「母親」という女性（あるいは母親代理の人物である「母親なるもの」）であろう。

以上のように、自他を区別し、自己認識の元となる、強力なかつ最初の「他者」として、「母親なるもの」が立ち現れるわけである。この、最初の他者としての「母親なるもの」が与える影響は、極めて絶大である。本論に即して、このことに関わる重要な点は、自他を区別させた最初の他者が、（ほとんどすべての人にとっては）母親という「女性」であるということである。赤子にとっては、そのほぼ全部を依存しなければ生きえない現前の母親という対象は、自他を区別する元であると同時に自他を区別しだした自分の中に、人間として今後生きていくために、取り入れる必要のある強力なモデルとしての最初の他者でもある。つまり、全面的に依存しつつ、かつ自他を区別しつつ、女性という性を持つ最初の（かつ絶対的な）他者である母親との自他関係を、赤子はどんどん形成していくわけである。この母親との自他関係を通して（あるいは、母親という他者を通して）世界への認知を深化させ、関係の持ち方を原初的に学んでいくわけである。いかにこの原初的な関

のではない。基本的に男性役割を規定する、文化と社会に方向づけられた「男らしさ」をモデルとして学習をする。このような「男らしさ」を伴った「男性」に向かうための「男の子」の課題は、言葉遣い、しぐさ、振るまいかなどである。それと同時に、「世界」との関係（もちろん、人間関係も含む）の持ち方も学んでいく。この世界との関係の持ち方を学ぶ方法は、子供にとっては基本的に「遊び」を通してであろう。この「遊び」において、子供はルールや道具を媒介として、母親や父親から離れた社会的他者（遊び友達）との関係を学んでいく。

〈補5—この場合、遊びのルールと共にある道具＝モノとの関係は、性同一性、性役割および「おたく」という男性に特有の現象を解析するキーポイントとなる。この「遊び道具」は、男の子にとっては、車や電車などのおもちゃ、めんこなど、女の子にとっては人形やままごとの道具、アクセサリなどである。しかし、この男女別に与えられるモノの差は上記で述べた性同一性、性役割、そしておたく現象に連なる関係構築に関して多大な影響力を持つ。このことは、本論の主旨に関わることなので、詳細に後述する〉

4. モノ・関係・人間らしさ

（家族制度を含めた）文化や社会は、性同一性をより同定し、性役割をより強化するために「遊び」を利用する。幼児期から始まる遊びにおける男女差は性役割を強化する。3章で述べたように、男女によって与えられるモノが違ってくる。

〈補6—遊びは性役割から決して自由ではない。社会・文化が規定する性役割に従って遊びが用意され、性別によって振り分けられる。すなわち、その遊びに含まれる道具＝モノやルールも性別を、つまり性役割を強化する方向にどんどん働く〉

この与えられるモノにおける男女差は重要で決定的である。女性の性役割を強化するために女の子は人形、ままごと、ぬいぐるみなどの擬人化された（人により近い形の）モノがあてがわれる。そして、それらのモノを通して、基本的に母親が自分にしたような形でそれ以前に母親をモデルにして学習し、心身に染み込ませたことを強化拡大する。

男の子と違い、これまでモデルにして蓄積してきたことを断ち切ることなく延長するのである。擬人化されたモノをとおして、その後複雑に展開されるであろう、人間との関係をままごとや人形遊びにおけるロールプレイを通してシュミレートするのである。このように女の子は、モデルとしての母親像を断ち切ることなく、しかもかなり早期のうちから、人形など擬人化された遊びの道具＝モノを通して「関係」を重視し志向する役割を取り込んでいくのである。

では、男の子はどうか。男の子はこれまで述べてきたように、強力なモデルとして内面化した母親像（＝女性像＋最初の原型的な関係モデル）を、いくら居心地良くても、3才くらいから無理やり断ち切っていかなければならない。文化や社会および家庭において「断ち切る機能」として貫徹する「父親なるもの」が、新たに身につけるべき「男性」という性役割を強制していく。すなわち、これまで心身に十分浴び、かつ身につけてきた「女らしさ」を断ち切りつつ、それに距離を置かねばならないのである。

〈補7—この乳児期を通して心身に強力に刷り込まれ、すでに在ってしまう「女性らしさ」は、断ち切ることによって完全に消えることはないであろう。繰り返すが、その女性という性の上に（ある意味で無理やり）男性らしさを載せていくというニュアンスの方が正確であろう。この結果、その「女らしさ」との距離感と抑圧のされ方が、その後の男性の「男性」としての在りようを規定するものと思われる。そして、同時に男性の性同一性、性役割発達のもとと

なっている、この内なる「女性らしさ」が男性としての性同一性、性役割の安定性を女性のそれに比べて、はるかに不安定なものとするのである。この点は本論にとって重要な論旨なので、再び後述する)

また、道具＝モノに関しても、先に述べたように女の子が、擬人化された、より人間に近いモノを与えられるのに対して、男の子は、それとは反対により人間から遠いモノを与えられる。このことを通して、女の子と正反対の役割、つまり、男性としての性役割を形成していく。すなわち、他者との協調的な関係を志向するのではなく、世界との関係をどのくらいモノ化できるかによって男性となっていくわけである⁸⁾。

〈補8－「男らしさ」を身につけていく、幼児期における男の子の遊びを見よ。ヒト的なものからほど遠いモノとしての固いものや機械－ロボット、車、飛行機、電車などのおもちゃをあてがわれる。あるいは、めんこや、ファミコンをとおしての競争的人間関係の展開など。また、モノ化については、男性は、女性という性も含めて、世界のあらゆることをものとして扱うこと－すなわちモノ化してきた。このことは、これまでの男性が中心に担ってきた歴史の経過をみれば一目瞭然であろう)

くりかえし述べれば、男性としての性同一性、性役割の基盤は、自分の存在のコアとなってしまう「女性らしさ＝女性なるもの⁹⁾」との距離によって規定されてくる。すなわち、それへの距離によってたとえば、「おかま」から「マッチョ」までのスペクトルを生むのである。

〈補9－この「女性なるもの」は、基本的に擬人化し、関係を志向するものである。つまり、他者との関係を(母子関係のように)育むことに集約されるものである。そこから離れるためには、擬人化の逆、すなわちモノ化が必要となってくる。男の子にとっての遊びの本質は、世界と関係のモノ化(モノとして序列・優劣をつけていくこと)である)

以上から、このような性同一性、性役割の獲得と形成における男女の違いは、精神分析学の視点からはかなり決定的なものとなりえる。すなわち、女の子に比べて、これまでの性同一性、性役割獲得のモデルを断ち切る努力を強いられ、その意味で遅れて、しかも新たに性同一性、性役割を身につけ始める男の子は、ハンディを負うことになる。つまり、先述したように根源的性として「女性」をコアに持ったまま、その上に「男性」を背負っていくことになる。そのことが意味することは、すなわち性同一性、性役割の同定と連続性の不安定さである。

〈補10－この視点にたつて極論すれば、(有り得ないが)文化や社会が放っておけば、男の子はみんな女性としての特性をかなり身につけてしまうこととなる)

ここまで述べてくるとまた、以下のようなことが見えてくると思える。すなわち、「人間」とは女性のことである。このことは、人間的美德とされる項目(たとえば、「優しさ」「思いやり」など)がいかに女性に強く求められる項目と合致しているかということからもわかる。もちろん、それらは同じ人間である男性に求められる項目でも有り得る。しかし、たとえば、とくに男性に求められるものとして「強さ」などはどうであろうか。まず、ある特定の誰かの強さを必要としない世界は非常なユートピアであろう。また、「強さ」はあるものより強いという比較の形で立ち現されることが多い。強さは弱さを打ち負かしたときに出現する。それに比べて「優しさ」は「優しくなさ」に対しても優しいであろう。少なくとも「優しくなさ」を打ち負かして成立する「優しさ」は本質的に存在しない。強さに関しては、次のようにもいえるであろう。「あるもの」より強くなるためには、その「あるもの」に人間的感情(例えば、優しさなど)を寄せるより、「モノ化」したほうがその「あるもの」に対して平気で強くなれるということである¹⁰⁾。

〈補11—よほどの状況か心が歪んでいないかぎり、「情」の入ったものを殺したりモノとして扱ったりはできないであろう。「情」をこめて関係を形成したペットとしての豚を、我々は平気で豚肉として平らげることは簡単には出来ない。モノ化した（つまり、「情」も「関係」もない）豚肉ならば、おいしく調理して平気で喜んで食べることができる〉

これまで述べてきたことから、男性がその性役割を身につけるために、モノを媒介とした遊びを通して学んできたことの本質が見えてくる。すなわち、関係においては競争すること。それを通してできるだけ世界をモノ化し、かつ（女性も含めた）よりたくさんのモノを獲得すること。それに対して女性は、ままごとや人形遊びなど女の子の遊びとされるものを通して、関係においては協調・協同し、世界をなるべく擬人化し、生じてきてしまったモノは分け合っていくことという対比が見えてくる。

まとめると、性役割を身につけ始める時期において男の子は、モノへの執着（しかも、機械のような非人間的なもの。あるいは、その後の金銭欲と権力欲の原形であろうモノをたくさん集めるという行為）を男性になるために志向するちょうどその時期に、女の子はたとえば人形遊びやままごとを通して、まさしく人間と人間の関係をシュミレートして、ますます「人間」らしくなっていくのである。

5. 「モノ」としてのセクシュアリティ

これまで述べてきたように根源的性としての「女性」という性が先行的に在ってしまう、男性は、女性に比べて、自らの性への強固な帰属感所属感を構造的に持ち得ない。その結果、自身の性に対して、不安定であり、その性の在り方との齟齬をきたしやすい。その一端を述べれば、程度の差こそあれ、男性の「性倒錯」は女性のそれに比べて圧倒的に多数で多彩であるこ

とがあげられる。男性の女装趣味、フェティシズム、痴漢、スカトロ、のぞき、露出¹²⁾などをみれば、男性の「性」がいかに大変で不安定であるか見て取れるであろう。

〈補12—いわゆる、のぞきや露出によって性的興奮を来すのは、おそらくほとんど男性のみであろう〉

[付記1—また、男性という性は、買春や強姦、痴漢などのように女性の身体をモノ化することによって成立する性の文脈を持ち続けている。上記の行為までいかなくとも、男性にとっての性的行為の本質は（精神分析学者の岸田がいうように）生身の女性の心身でなく、程度の差こそあれ、男性の行為者の「幻想」を相手の女性に投影した上で成立する。エロチックな下着や制服への幻想、個々人の性的な嗜好への幻想が男性の性を可能にしていくのである。すなわち、男性は女性の身体そのものでなく、投影した幻想に興奮する。]

〈付記内補1—母なるものから、すなわち「女性」から離脱して／させられて、男性という性同一性、性役割の獲得と形成を開始する際、遊びを通して自分を取り巻く「世界」をモノ化する傾向の延長線上にこのことも位置づけられるように思える〉

6. おたくの生成

最後に「おたく」という現象について述べる。このことは、女性に対して、なぜ男性に極めて多く「おたく」がいるのだろうかという問いに答えることでもある。もちろん、この答えに向かう考察は、これまで述べてきた性同一性、性役割の獲得・形成過程と密接に関連するものとなる。

さて、男性が突出的に多い「おたく」の世界にはどんなものがあるだろうか。この場合の考察対象となる「おたく的世界」は、「擬人化」がかなりあり、人間的物語が成立しやすい（そ

のため女性にもマニアがかなりいる)たとえば、「アニメの世界」を愛好する「おたく」ではない。ほぼ男性しか愛好者がいないような、きわめてモノ志向の強い世界—ガンマニア、ナイフマニア、鉄道マニアの電車列車への偏愛などのモノマニアックな「おたく的世界」の男性を対象として、性同一性、性役割の獲得、形成過程を絡めて分析考察する。

まず、最初に着目する点としては、そのような「おたく」である男性たちは実際の間人間関係、とりわけ、女性との関係におおむね不器用であることである。あるいは、現実の間人間関係、女性との関係に不器用であるからこそ、おたくとなって現実から逃避し、モノとの世界において、モノとの関係に器用になろうとしている。

他者と関係を形成するというのは、関係を取りたいと思うその人の状況を把握して、適切な関係に結び付く距離感を形成することである。逆にいうと、不適切な関係、あるいは、関係がうまく形成できないというのは、相手との距離感をじょうずに認識できないということであろう。これを、上記で述べたおたくの男性の成立に至る性同一性、性役割形成過程に重ね合わせてみると以下のようなことが指摘できるだろう。

すなわち、女性より遅れて、男性という性同一性、性役割を獲得するために、男性は自分が男性になるためのモデルを、母親との2者共生関係から切断された後、その新たなモデルを定置してそこから学んでいかねばならない。基本的にそれは、主に家族制度における「父親なるもの」と社会・文化全体が要請する「(男性としての)性役割行動=男らしさ」から学ばれていく。この(女性に比べて)きわめて幅広いスペクトル—つまり、生まれたときにまさしく目の前にある「母親という女性モデル」によって、より幼児期に徹底的に密着してモデリングをし、かなりタイトに(選択の幅がほとんどない状況で)女性の在り方を根源根本から心身に身

につけた女性に比べて、男性は、きわめて幅広いスペクトルでそれまで心身に身につけてしまった女性性の上に新たに男性性を身につけていかねばならないことは先述した。このことは、男性としての性同一性、性役割を(女性と対比して)タイトにしない。なぜなら、精神分析学や動物行動学の分野でもいわれているように、より若い頃に刷り込まれたものの影響力の強さはよりタイトでより決定的であるからである。このタイトではないことが、まさしく男性に性的な混乱—すなわち、性同一性、性役割への齟齬と混乱を招くもととなるのである。

さて、以上のことを踏まえた上で「おたく」の生成について話を戻す。

女性が幼少期に母親—女性モデルの延長強化として、人形遊びやままごとなどを通して培ってきた人間関係のいわば訓練と適切な距離の持ち方を男性は、女性のように幼少期に行えない。そのようなことをすれば、ますます「女性」になってしまうからである。そのため、先述したように、女性性からの離脱のため、上記のような人間関係に繋がるような遊びは断念させられる。そのかわり、人形のような擬人化されたモノではなく、よりモノらしいモノを与えられて、母子共生の残滓を(女性としての残滓を)排除する方向に向けられていくわけである。もちろん、この排除は、先程のべた動物行動学の「刷り込み」の理論や精神分析的発達論における臨界的特性すなわち発達段階の不可逆性からして完全に成し得ることは不可能である。

では、男性はどのようにして女性が人形遊びを通して学び、身につけてきた(モノではない、より人間に近いものとの)関係への距離感を学んでいくのであろうか。それは、基本的には思春期になり、性的に成熟してくるにしたがって(精神分析学でいえば、潜伏期から性器期に移行して)生身の女性に恋をすることを通して、それまでのモノ化からの離脱をはかるのである。(このことは、それまでにつちかって

きた特に女性との家族関係や友人関係がどのくらいモノ志向と拮抗してきたかの「あらわれ」のピークでもある)人形でなく、人間の女性によって学ぶのである。そして、そこでの失敗や挫折、あるいは、その時点ですでにモノへの方向づけが強烈で、生身の女性にうまくアプローチできない男性は、容易により安全だとおもわれる、慣れ親しんだ世界にどんどん退行する。つまり、かつての女性性からの離脱のために与えられたモノの世界に再び自閉していくのである。これが、いわゆるモノマニャックな「おたく」の生成である。

以上から、見えてくるように「おたく」という現象はある種の退行現象である。そして、この現象は、より詳細に述べると2方向に展開する。ひとつは、モノ世界に退行する、先述したような形のいわゆる「おたく」。すなわちモノへのおたくである。いまひとつは、モノに向けて退行せずに性そのものをモノ化して「遊ぶ」方向に展開する。つまり、性をモノ化して遊び道具とする、多彩な性倒錯に通じるベースを形成する、性への「おたく」である。¹³⁾

〈補13—ほぼ、男性に特有のフェティシズム(ブルセラショップ、ハイヒールマニア、女性の脚やお尻などの身体の部位に執着するマニア、制服マニアなど、その種類と多様性は無限に近い)やSMにおける技法や小道具への「こだわり」などを考えれば、それがいかにマニャックで「おたく」と共通の基盤を持つかよくわかるであろう〉

以上、2方向での「おたく」が意味することは、女性と共人間的な関係を育むための距離感の形成の失敗ということである。言い換えれば、男性という性同一性、性役割に先立ってあってしまう根源的な性、すなわち、女性という性の社会的・現実的修正の機会における失敗である。また男性という性を意識として背負った形での、実際に母でない他の女性との「母子関係」の再構築の失敗の結果でもある。

7. 結語

本論文は、男女における性同一性、性役割の獲得・形成過程の違いと、その違いによって生じるひとつの帰結としての「おたく」という現象を論じた。以上を論ずるに当たっては、主に精神分析学の知見からの理論を機軸として援用した。

8. 解題

家政の領域はもちろんのこと、およそ男女の関係が生じるあらゆる領域において、「フェミニズム」や「女性学」の果たした役割がきわめて大きいことはいままでもない。この双方は、基本的に当事者である女性の側からの展開が軸である。時にその「つきつけ」にあつてとまどい、揺れ動きつつ、それに答え、対応する形で、男性という性の在り方を検討考察する、いわば「男性学」という領域もここ数年、徐々にではあるが、学際的な蓄積を重ねつつある。本論も女性の性の成立と対比して、男性という性の成立と在り方を論じて、上記のような「男性学」に向けての一視座を提示した。

[参考文献]

1. 母親・父親・掟 (精神分析による理解)
佐々木孝次：せりか書房 (1979)
2. ものぐさ精神分析
岸田 秀：青土社 (1977)
3. 別冊宝島104おたくの本
J I C C 出版局 (1989)
4. 別冊宝島112男が危ない！ ?
J I C C 出版局 (1990)
5. 玩具と理性
E・H・エリクソン (近藤邦夫訳)：みすず書房 (1981)
6. イメージ世代の心を読む—疑似現実はどう

- いう人間を生み出したか
 福島 章：新曜社（1991）
7. 〈男らしさ〉のゆくえー男性文化の文化社会学
 伊藤公雄：新曜社（1993）
8. セクシュアリティ 日本のフェミニズム
 井上輝子ほか編：岩波書房（1995）
9. 男性学 日本のフェミニズム別冊
 井上輝子ほか編：岩波書房（1995）
10. コミュニケーション不全症候群
 中島 梓：築摩書房（1991）
11. 豊かさの精神病理
 大平 健：岩波書店（1990）
12. Mの世代ーぼくらとミヤザキ君
 大塚英志ほか：太田出版（1990）
13. 男という病
 ヴィルフリート・ヴィーク（梶谷雄二訳）
 ：三元社（1991）
14. F B I心理分析官
 ロバート・K・レスラー（相原真理子訳）
 ：早川書房（1994）
15. 診断名サイコパス
 ロバート・D・ヘア（小林宏明訳）：早川
 書房（1995）
16. 性の署名
 ジョン・マネー（朝長新一訳）：人文書院
 （1979）
17. ジェンダーの社会学
 江原由美子他編：新曜社（1989）
18. 性幻想と不安
 ドロシー・ディナースタイン（岸田 秀、
 寺沢みずほ訳）河出書房新社（1984）
19. 生きるのが怖い少女たち 斎藤学：光文社
 （1993）